

歴史に埋もれたもう一つの日本

～山村の歴史文化を再評価する～



白水 智
SHIROUZU Satoshi

中央学院大学／教授

人はなぜ「ポツンと一軒家」に惹かれるのか

テレビ朝日系列で放送されている「ポツンと一軒家」。山中に孤立する一軒家を訪ねては生活ぶりや来歴の話を聞く、というだけの番組で、凝った演出も派手な登場人物もいない。主役はあくまでそこらで暮らす住人自身である。日曜夜のゴールデンタイムにもう7年も放送され続けているのは、一定の人気があるからだろう。いったいなぜ視聴者は山中で

の暮らしぶりを紹介するだけのシンプルな番組に惹かれるのだろうか。

もちろん何か自分たちの日常と異なるものや驚きがなければ視聴者を惹きつけることはできず、番組としては成立しない。驚きを誘う一つの要素は、薪で風呂を焚き、自給自足的な食生活をしているなど現代の都市生活とはかけ離れた生活の一面であろう。「時短＝効率の優先」や肉体的負担の軽減、つ



写真1 長野県秋山郷小赤沢集落の秋。背後は日本百名山の苗場山

まり「楽」であることを良しとする現代的価値観からすれば、およそ正反対といつていい。しかし、ここには、自らの手で生活を成立させられる力への憧れや共感があるのではないか。燃料も食料も他者に依存しなくては生きていけない都市住民には決して手の届かない「安心」である。

もう一つの要素は、「幸せとは何か」を考えさせられることであろう。現代人の多くが不便＝不遇＝不幸せと無意識に考え、より便利で快適な生活を求めていることからすれば、不便の極北ともいべき山中の一軒家暮らしなどは不幸せの塊だということになる。ところが、案に相違して「ポツン」住人たちはほとんどが今の生活に満足しているか、少なくとも自ら納得してその生活を選択しているのである。つまり「便利」と「幸せ」は同じ地平では語れない、ということが明らかにされるのである。

実はこうした都市住民と山地住民との意識差は、江戸時代にもあった。江戸時代後期、越後（新潟県）塩沢町の富裕な商人であり文人でもあった鈴木牧之が、信越国境の秘境とされていた秋山（現代の観光地名称としては秋山郷）を旅して、イラスト入りの紀行文『秋山記行』を残している。牧之は、秋山には原始的な未開人が暮らしているようなイメージで出かけるのであるが、行く先で多くの山暮らしの人々と触れ合い、そのありさまを自ら見聞した結果、末尾では秋山の素晴らしい感嘆の思いを抱き、自らも命の洗濯をするために庵を構えたいとまで述べるに至るのである。

山のホームセンター・山のスーパー・山のガソリンスタンド・山のドラッグストア

現在、日本の人口は約1億2,000万人であるが、その大半の約91%が都市部に暮らしており、国土面積の6割が過疎地となっている。一方、江戸時代の人口は3,000万人ほどと考えられ、現在の4分の1に過ぎない。しかも、現代なら過疎高齢化の象徴とさ



写真2 静岡市井川の焼畑。ここにはソバとカブの種を蒔いた



写真3 秋の山の恵みである天然キノコ

れる山間地に、江戸時代には幼児から老人まで年代に偏りなく暮らしていた点も大きな違いである。果たして山のどこに大勢の人口を養える力が秘められていたのだろうか。

例えば、山梨県早川町は約370km²の面積を有し、町の96%が森林に覆われた山間の町である。2025年4月の人口はわずかに895人、高齢化率も47.1%（2023年統計）と、まさに過疎少子高齢化のモデル



写真4 マルバマンサクの枝は優れた結束材として使われた



写真5 イノシシの解体

のような町である。ところが、江戸時代に遡ると様相は一変する。今から225年前の1801(享和元)年には同町域の人口は4,192人と、現代の4.7倍ほどもあった(『甲斐国志』)。しかも、全国の人口が今のが1分の1だった時代に、である。いかに山間地に多くの人が暮らしていたかがわかる。では、その人たちを支えた山の暮らしとはどのようなものであったのだろうか。

現代では山間地には林業や観光業、公務員などの仕事を除くとほとんど仕事がないように思える。しかし、江戸時代には多くの人口を養えるだけの仕事があった。実は、山地は多様で多量の資源に恵まれた地で、今でいえばスーパー・ホームセンター・ガソリンスタンド・ドラッグストアを抱えているようなものであった。つまりは食料・日用品・燃料・薬品など生活に必要なさまざまな物資の調達が可能だったのである。以下に山の主要な生業を見ていこう。

[農業] 山間地は水田経営には不利であったが、家の周囲の常畠(恒常的な畠)に蔬菜を作り、また広大な斜面にはしばしば焼畠を切り開いた。焼畠は草木を伐り払って焼き、その後に雑穀・芋類・野菜などを育てる農業で、数年間利用すると地力が衰えるので放棄して他へ移動し、数十年後にはまた利用するという、循環的な農法である。雑穀類も多種類のものを植え付けることが多く、主食を得る畠としてその意味は大きかった。

[林業] 建築に使う柱材や板材、屋根材などを生み出す林業は、山間地の主要な産業であった。古代以来、天皇の宮殿から庶民の家まで日本の家とい



写真6 万能薬とされる熊の胆(胆囊)。金と同等の重量で取り引きされた

自在に駆け巡り、動物を獲た。また猟師にとっては漁撈も夏場を中心とする大事な生業であり、かつては魚が格段に多かったこともあって、生活の糧となつた。

[炭焼き・木工] 林業以外にも木を利用した生業として炭焼きや木工がある。もちろん薪も重要な燃料であったが、特に木炭は人口の密集する都市では煙の出ない熱源として重宝された。石油や石炭が本格的に使われるようになる以前、日本の燃料はほぼ山から供給されたと言っても過言ではない。また、木鉢やしゃもじ、箸、まな板などの飲食・調理具も多くが山から供給された。その他にも生活道具の多くを木工品が占め、木工は重要な生業であるとともに、平地生活を支える存在でもあった。

山地には平地も含めた日本全体を支える多量の資源が包蔵されていた。そして山に住まう人々は、それらを引き出し、自らの生活を支えるとともに平野部・都市部に移出したのである。ここから言えるのは、山地からの産物を引き出す行為が自給的な側面をもっていたと同時に、商品としての性格を持っていたということである。

山間地は非常に自給性が高い。米を除けば、動植物性の食料も、燃料も、生活資材においても、山は暮らすのに十分な資源を提供する潜在力を豊かに持っていた。これら豊かな資源の存在が多種多様な生業を生み、多くの人々を養ってきた要因であった。ただ、いくら資源が豊富でも、それを生かすには知識と技能が必要であった。慣れない都市民がいきなり山に入っても、何もできないのである。山地の人々は山の動植物を知り尽くし、それらを縦横に利用してきた。そして季節により生業を変え、それらを組み合わせて生きていたから、「何でもできる」ことが求められた。山梨の山間地などでは今でもそういう多種の知識・技能を身につけている人々を「マンノウガン(万能丸)」と表現する言い方が残っている。

一方で、材木・木工品・薪炭など平地生活を支える多種の产品を山は供給し、平地からは米や塩が移入され、相互に支え合って生活は成り立っていた。山は自給のみで閉ざされた社会ではなく、平地との交流を前提にした性質も併せ持っていたのである。例えば、前出の早川入(早川町)では、山中の有力

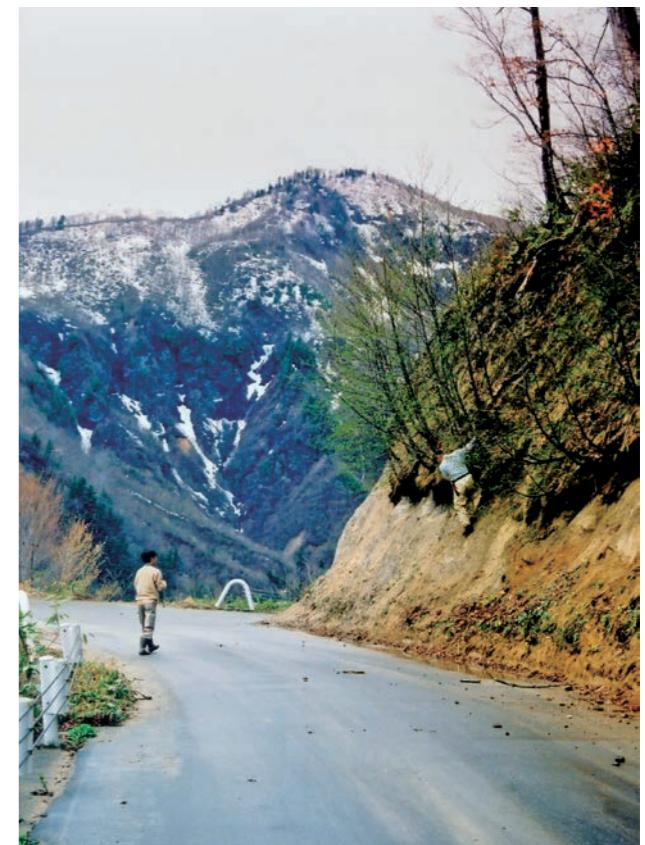


写真7 崖を難なく下る山人の技

者が江戸の材木問屋や中継地の清水湊(静岡市)と密接なつながりを持っていた。また早川の一般住民も林業の職人として各地へ出かけたり、稲刈りの手伝いに出たり、篩張り替えなどの渡世に出たりと、平地との交流は日常的であった。村の名主を務めていた百姓が江戸の武士と猿肉や猿皮の取り引きをしている書状も残されている。早川最奥の集落である奈良田は、秘境と称されたりもするが、もともと東へ山越えして甲府盆地方面に木工品を売りに行くのを商売にしており、戦国期以来、道中の課税免除の保証も得ていた。本来、山村は平野部と交流する属性も持っていたのである。

少子高齢化にあえぐ過疎の村という現代のイメージから、山村を歴史的に貧困に苛まれ、孤立した存在であったと見なしたり、住人が少なく活気のない社会だったと断じることは決して正しいことではないのである。山村が伝えてきた豊かな自然知と身体文化は、間違いなく「もう一つの日本文化」と呼べるものである。今こそ私たちは価値ある人類文化としてそれを後世に伝えていかなくてはならない。